奈文研ニュース

No.87 Dec 2022

NABUNKEN NEWS

独立行政法人 国宝重要文化財等保存活用機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2-9-1
https://www.nabunken.go.jp

奈良文化財研究所第14回東京講演会の開催

2022年10月22日、有楽町朝日ホールにて「高松塚古墳壁画を伝える―発見から石室解体、修理を経て」と題した講演会を開催しました。この講演会は、奈文研創立70周年と高松塚古墳壁画発見50周年を記念したものです。これまで、高松塚古墳とその壁画の調査、保存ならびに活用については、東京文化財研究所と奈良文化財研究所が協力しておこなってきたことから、この講演会は両研究所による共催という形で開催されました。

奈文研から３名、東文研から２名の講演をおこなった後、奈文研の本中所長、高妻副所長、東文研の齊藤所長、早川副所長をパネラーに、建石東文研保存科学研究センター長をコーディネータとして総合討論「高松塚古墳壁画と文化財保護」をおこないました。

奈良文化財研究所　第14回東京講演会チラシ

講演では、世紀の大発見となった高松塚古墳壁画の発見から現地保存、壁画の劣化から石室解体にいたる経緯、壁画を救うためにおこなわれた石室解体事業の実際と発掘調査、高松塚古墳壁画の彩色や漆喰の分析調査、カビで汚れた壁画のクリーニングや漆喰の強化処置、高松塚古墳現地の仮整備と公開活用について詳細に報告がなされました。

総合討論では、高松塚古墳壁画の劣化と保存に関わる問題を掘り下げ、そこから得られた様々な教訓を再確認するとともに、壁画を保存するために新たに開発された分析調査法や修理法にも言及しました。さらに、文化財をいかに社会に位置づかせるか、地域社会における文化財の果たす役割、文化財が地域の持続的な発展を促すこと等についても議論がなされたことは、文化財保護の将来を考える上で一つの提言となったのではないかと思います。

（副所長　髙妻 洋成）

東京講演会の様子

発掘調査の概要

興福寺東金堂院北面回廊の調査（平城第649次）

奈良文化財研究所では、これまで興福寺境内の調査を積み重ねてきました。2020年からは東金堂院の回廊と門の調査を継続しています。今回の調査は、東金堂院の北面の回廊の規模と構造をあきらかにすることを目的に、興福寺国宝館の南側に調査区を設定しておこないました。

東金堂院は中金堂院の東に位置し、東金堂と五重塔を中心とする区画です。周囲を単廊と築地塀で取り囲んでいたとみられ、北面と西面が礎石建ちの単廊、東面と南面が築地塀と考えられています。奈良時代の興福寺境内の様子を伝える『興福寺流記』（平安時代末頃成立）によると、東金堂は神亀３年（726）、五重塔は天平２年（730）の創建で、東金堂院の門・回廊・築地塀も同時期に建てられたとみられます。創建以後、東金堂と五重塔は５回の火災に遭い、現存する東金堂と五重塔は室町時代に再建されたものです。

今回の調査区は335㎡で、うち12㎡が1975･76年の調査区と重複します。以前の発掘調査では、東金堂の北側で北面回廊の基壇や礎石を検出しており、一部の礎石は現在も地表に露出しています。

検出した遺構は、北面回廊の一部（東西約28m）と、回廊が廃絶した後の石組溝や、江戸時代の絵図等に描かれている参道の一部です。回廊については、礎石やその据付穴・抜取穴、基壇および基壇外装や雨落溝を検出しました。

北面回廊についてみていきましょう。回廊の礎石やその据付穴・抜取穴を12ヵ所で検出し、桁行７間分を確認しました。このうち、７ヵ所に礎石が残存していました。北面回廊は梁行１間の単廊で、柱間寸法は桁行が約3.4m（11.5尺）等間で、梁行は約3.5m（12尺）となります。回廊の規模と構造は、これまでの調査で判明している北面回廊の成果と整合します。礎石は直径ないし一辺が0.5～0.8mの大きさで、厚みは0.3～0.5mです。石材は安山岩と花崗岩で、柱座をつくり出さない自然石が用いられています。一部の礎石には柱が立っていた痕跡と被熱痕跡があり、直径約0.36m（1.2尺）の円柱が立った状態で被災したことがわかります。

基壇の規模は、幅が約6.3m（21尺）、高さは北辺が0.5m、南辺が0.1m程度、礎石からの基壇の出は南北とも約1.4mです。基壇外装については、北辺で石を３段積んだ乱石積基壇を確認しました。基壇外装を構築する石材は凝灰岩や安山岩等、多様な種類を用いており、大きさもばらばらです。また、凝灰岩切石が自然石と混在することから、この乱石積基壇は奈良時代の創建当初のものではなく、創建当初の位置を踏襲しながら平安時代に再建したものと考えられます。

基壇の北辺と南辺で東西方向に延びる雨落溝では、瓦が捨て込まれた様子や、焼土が集中して堆積している様子を確認しています。また、基壇を南北に横断する暗渠を検出しました。東金堂院内部の雨水を南雨落溝で受け、暗渠を通じて北雨落溝に排水していた様子があきらかになりました。

今回の調査では、東金堂院北面回廊の建物と基壇の規模・構造があきらかになるとともに、その再建と変遷の様子もわかりました。東金堂院北面回廊は従来の復元案よりも東へ延び、東西100m以上となることが確定しました。また再建時も創建当初とほぼ同じ位置と規模を踏襲したことがあきらかとなりました。『興福寺流記』や興福寺を描いた絵画資料等から、東金堂院には、東金堂と五重塔のほかにも建物があったことが指摘されています。東金堂院の規模が従来の想定よりも大きくなることによって、東金堂院の内部構造を再検討する必要が生じるとともに、興福寺における東金堂院の性格を考える上で重要な成果を提示することができました。

10月15日（土）の現地見学会には1,120名が参加しました。ご協力頂いた関係者の皆様に御礼申し上げます。　（都城発掘調査部　垣中 健志）

調査区全景・五重塔を臨む（北から）

奥山廃寺の調査(飛鳥藤原第211-6次)

奥山廃寺は、山田寺の西約800mの奥山集落内に存在した古代寺院です。現在は、浄土宗久米寺があり、一般に「奥山久米寺」と呼ばれてきましたが、「久米寺」という寺名がいつまで遡るかは、定かではありません。伽藍配置は、集落各所におけるこれまでの調査成果から、塔・金堂・講堂が南北に直線上に並ぶ四天王寺式であったことがほぼ確定しています。奥山廃寺の主要堂宇については、東西幅23.4m、南北幅約19mに復元される金堂基壇が注目されます。これは、山田寺金堂を上回り、川原寺中金堂に匹敵する大きさで、飛鳥時代の寺院の中でも第一級の規模を誇ります。ただ、これほどの大寺院であったにも関わらず、文献史料には確実な記述がなく、今も多くの謎を秘めた寺院です。

今回の発掘調査は、個人住宅の建て替えにともなうもので、調査面積は26㎡です。調査区の位置は、塔跡から南東へ約50mの地点で、塔や金堂を囲む回廊の東南隅から15mほど東にあたると考えられます。調査の結果、残念ながら、奥山廃寺に関わる遺構を確認することはできず、また、出土遺物の量も多くはありませんでした。このような調査成果は、調査区全体が後世の削平を受けていたことも一因ですが、当初の推定どおり、本調査地が、奥山廃寺の主要伽藍を構成する建物からは距離があったことを示すものともいえます。今後も今回のような小さな調査を積み重ねることで、寺院の当時の姿をあきらかにしていきたいと思います。

（都城発掘調査部　若杉 智宏）

調査区全景（西から）

古代但馬の出土文字資料集成刊行

但馬は、現在の兵庫県北部地域にあたります。その中央を、円山川が中国山地の雪解け水を集めてゆっくりと北流し、城崎温泉のすぐ東で日本海へ注ぎます。この豊かな流れは、ときに洪水を引き起こすこともありましたが、穀倉地帯の源となり、コウノトリやオオサンショウウオを育み、さらに地下の木簡を守る自然の恵みともなりました。

自然豊かな但馬は、全国屈指の古代出土文字資料の宝庫でもあります。1977年、但馬国分寺跡ではじめて木簡が出土して以来、史料調査室（現史料研究室）は、地元の依頼をうけて、釈読に協力してきました。平安時代の国府跡とみられる袮布ヶ森（にったがもり）遺跡（豊岡市日高町）、出石郡家に関わる袴狭（はかざ）遺跡群（同出石町）等から続々と文字資料が出土し、但馬の出土文字資料は、木簡426点、墨書土器1279点、漆紙文書（うるしがもんじょ）3点を数えます。国府・郡家・国分寺という地方の三大拠点すべてから木簡が出土している国は、日本中をみわたしても但馬しかありません。

類いまれなるこれらの資料をまとめたいという、地元からの強い要望がありました。そこで、都城出土の古代但馬国関係木簡を含め、最新の赤外カメラを駆使した高精細撮影と全点の悉皆再釈読を柱とした連携研究を、飛鳥・藤原地区が中心となって豊岡市立歴史博物館、兵庫県立考古博物館と進め、このほど、『古代但馬国関係出土文字資料集成』を上梓しました。45年にわたる継続した調査研究と、発掘調査から遺物の保存や活用までに尽力されてきた多くの方々のご協力の賜物です。幸い本書は増刷が認められ、少部数ながら頒布の予定です。篤学の士の手に届き、広く活用されることを願います。

（都城発掘調査部　山本 崇）

豊岡市袮布ヶ森遺跡出土漆紙文書の調査風景

二〇二〇年度の平城第六二一次調査では、内裏と東方官衙地区の間を流れる基幹排水路SD二七〇〇から、六〇〇〇点以上の木簡が出土しました。中でも注目されるのが、女官の勤務評定に使われた木簡です。

役人の勤務評定をおこなう際には、一人につき一枚の木簡を作成して、事務作業をおこないます。

これまで、男性役人の勤務評定に関わる木簡やその削屑は多数出土していますが、女官の勤務評定の木簡がみつかったのは、初めてです。

冒頭の「牟須売」が役人の名前で、「売」（＝め＝女）が末尾に付くことから女性とわかります。

割書き右行の「年五十九」は年齢。女官は若くして出仕したと推定され、五九歳の「牟須売」は、かなりのベテランであったとみられます。

その下の「日」は昼間の勤務の意味で、「参佰弐拾玖」（＝三百二十九）は一年間の勤務日数。木簡に見える男性役人の勤務日数は、年間三〇〇日を超えることが少ないという実態があきらかになっています。年間三二九日の勤務は、かなりのハードワークといえそうです。

今後も同様の木簡がみつかり、女官の勤務実態があきらかになっていくことが期待されます。

（都城発掘調査部　桑田 訓也）

平城第621次調査　基幹排水路SD2700（北から）

女官の勤務評定に使われた木簡

□牟須売　年五十九　日参佰弐拾玖　□
左　□
〔坊カ〕

（赤外）

長さ（一六五）㎜・幅二五㎜・厚さ八㎜

※写真は実寸大。長さの（　）は欠損があることを示す。

高松塚古墳壁画男子女子群像「乾拓」体験イベント

10月15、16日の土日に国営飛鳥歴史公園館前にテントを設置し、高松塚古墳壁画男子・女子群像の「乾拓」体験イベントを開催しました。これは高松塚古墳壁画修理作業室の公開（第39回）にあわせて、国営飛鳥歴史公園と奈文研が主催したものです。

奈文研ではこれまでに高松塚古墳とキトラ古墳のすべての壁画の乾拓板を製作しています。この乾拓板は壁画の図像を原寸大で陽刻した板の上に紙を乗せて、鉛筆等でこすって絵を写し取るものです。ステンレス製の板に高さ0.1～0.2mmの線が付けられています。

高松塚古墳壁画の人物像は、男子、女子群像とも、西壁と東壁の両方に描かれていて合計４枚あり、今回はそれらの乾拓板を用意しました。また、乾拓に用いる紙には、「和紙の里 吉野」でつくられた手すき和紙を使用しました。参加費は１枚につき300円です。乾拓が完成した後には、練り朱肉を使って飾りの落款印を添えました。

当日は秋晴れで気持ちの良い気候にも恵まれ、15日には23名、16日には33名という多くの方々が参加しました。体験されたお子様たちからは、「面白い」「塗り絵みたい」、大人の方々からも、「夢中になる」「いいお土産になった」「壁画はこんなに大きかったのか」「残っている部分と消えてしまった部分がよくわかる」等の感想が寄せられました。

このようなイベントは今後も開催する予定です。また、キトラ古墳には、キトラ古墳壁画の乾拓板が墳丘前の屋外に常設されています。ぜひ一度乾拓を体験してみてください。（文化遺産部　中島 義晴）

西壁女子群像の顔の周りが出てきた様子

次世代に文化財をつなぐためご支援を！　―文化財保存修復研究基金―

この度、"奈良文化財研究所 文化財保存修復研究基金"の寄付箱が平城宮跡資料館・藤原宮跡資料室・飛鳥資料館の３ヵ所に設置されました。被災文化財の救出と保存事業、国際協力事業、発掘調査報告書の電子化と公開事業、木簡の保存処理事業、歴史災害痕跡データベース事業の５分野への支援として、広く寄付を募るものです。平城宮跡資料館の寄付箱には楽しい仕掛けも設けてありますのでぜひお試しください。なお、Webから寄付ができる国立文化財機構寄付ポータルサイトもあります。

飛鳥資料館、平城宮跡資料館では「なぶんけん応援ガチャ」（１回200円）も始めました。売上は上記基金として活用します。平城宮跡資料館では出土遺物や、公式キャラクターのキュートぐみ缶バッジ、企画展の期間限定グッズほか、図録等の当たりが出ることも。飛鳥資料館では飛鳥の古墳や寺院の出土品、富本銭、須弥山石等８種類のピンバッジです。

ここでのみ入手できる缶バッジやピンバッジを手に、モチーフになった展示品を資料館で探すのもおすすめです。皆様のご協力をお待ちしています。

（企画調整部　岩戸 晶子・飛鳥資料館　清野 陽一）

平城宮跡資料館に設置された寄付箱とガチャマシン

飛鳥資料館のガチャアイテムのピンバッジ

植生史学会・花粉学会合同大会の開催

去る９月30日から10月３日、奈文研の共催事業として、日本植生史学会・日本花粉学会の合同大会が、平城宮跡資料館講堂およびオンラインによるハイブリッド方式で開催されました。今回の大会は、「植物」を対象とする隣接した分野の二つの学会が、過去・現在・未来について研究発表会をおこないました。両学会の新たな発展につなげていこうとする初めての試みでした。

10月１日には、『奈良の森と花粉と人のいま・むかし』と題した２部構成の公開シンポジウムをおこないました。第１部は、「古都奈良の植生と木材利用」というテーマで、古代を中心に奈良盆地周辺の植生や平城京での木材利用について、近年の花粉分析や樹種同定の成果をもとに議論しました。第２部は「奈良の森林利用と花粉症の過去・現在・未来」というテーマで、民俗学的な吉野の木材利用、気象の側面から花粉の飛散状況や医学的な花粉症治療の現状が議論されました。

10月３日は、エクスカーションとして大阪産業大学・前迫ゆり教授（生態学・植生学）を講師に迎え、春日山原始林を見学しました。長年にわたり春日山原始林を生態調査されている前迫先生の解説を聞きながら、ここ数十年の春日山原始林の変遷を体感できるエクスカーションでした。

今回の研究発表・シンポジウム・エクスカーションを通じて、当該分野の研究者の一人として、植物遺体を対象とした研究の重要性を再認識しました。今後の研究の進展に寄与できればと思います。

（客員研究員　上中 央子）

春日山原始林エクスカーションの様子

「ニコニコ美術館」生配信

10月31日と11月12日、ニコニコ動画内公式チャンネル「ニコニコ美術館」にて、「奈文研編」「平城宮跡編」の二回にわたって奈良文化財研究所を特集した生配信がおこなわれました。

第１回の奈文研編では、高妻洋成副所長による奈文研の組織紹介をはじめ、史料研究室、歴史研究室、国際遺跡研究室等を訪問。平城宮跡での発掘調査に加え、古文書や海外の遺跡等奈文研の携わる幅広い研究事業について紹介しました。後半は平城宮跡資料館にて「地下の正倉院展―平城木簡年代記《クロニクル》―」を解説。普段見ることのない研究員たちの仕事場や熱の入ったトークに、リアルタイムでの視聴者コメントも盛り上がりました。

第２回の平城宮跡編では、建築や瓦、歴史の研究員が解説をおこないました。まずは朱雀門を出発し、今年竣工したばかりの大極門へ。第二次大極殿跡、奈良時代の主要排水路「東大溝」等を巡り、朱雀門ひろばに建つ「平城宮いざない館」では「のこった奇跡　のこした軌跡―未来につなぐ平城宮跡―」展を紹介しました。両配信ともに約５時間にわたる大長編となり、ライブ視聴者数は第１回が2.3万人、第２回が1.9万人、番組内アンケートでは最高評価が97％を超える等好評をいただきました。視聴者からは「堅苦しいイメージの研究所を身近に感じられた」との感想も寄せられ、今まで馴染みのなかった方にも奈文研・平城宮跡に興味を持っていただく機会となったのではないでしょうか。番組はどなたでもパソコンやスマートフォンから視聴できますので、ぜひアクセスしてみてください。

（企画調整部　下山 千尋）

第二次大極殿跡での撮影風景

令和４年度　飛鳥資料館冬期企画展「飛鳥の考古学2022」

新型コロナウィルス感染症の影響は、寄せては返す波のように、何度も拡大と縮小を繰り返しています。飛鳥資料館においても、苦渋の決断として臨時休館を決めた時期もありました。そのような状況下でも、飛鳥では各研究機関の地道な努力により発掘調査が続けられています。飛鳥では飛鳥京跡苑池の調査が一段落し、甘樫丘遺跡群の調査も始まっています。大官大寺南方や石神遺跡の調査も継続中です。藤原京域では藤原宮大極殿院北部の様相が解明されつつあり、藤原京右京五・六条八・九坊、慈明寺遺跡、四条シナノ遺跡の調査は一区切りを迎えました。このほかにも、飛鳥地域から出土した遺物に関する最新の調査研究の成果もあわせてご紹介します。この冬は飛鳥資料館で最新の調査研究成果に触れてみてはいかがでしょうか。

（飛鳥資料館　清野 陽一）

会　　期：2023年１月20日（金）～３月12日（日）
開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）／休館日：月曜日　※２月５日（日）は無料入館日
主　　催：飛鳥資料館・奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会
後　　援：文化庁、近畿日本鉄道株式会社
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/asuka/　お問合せ：☎0744-54-3561

平城宮跡資料館　展示紹介「東大溝（SD2700）発掘風景 ジオラマ」

平城宮跡資料館のガイダンスコーナーでは、発掘風景を再現したジオラマを常設展示しています。このジオラマは1987年に作成されたもので、東大溝と呼ばれる平城宮内の排水路での発掘調査を題材にしています。現在は「遷都」、「発掘」、「実測」、「整備」の４場面をみることができます。「遷都」の場面では長岡京への遷都を前に建物の柱を抜き、瓦を運び出して建物の解体をする様子、「発掘」の場面では発掘調査が始まり、作業員たちが出土した遺物を取り分けながら鍬やスコップを使って地面を掘り下げる様子……と、ジオラマの景色が移り変わっていくのを楽しみながら、時代によって姿を変える平城宮跡と発掘調査の歴史に思いをはせていただければ幸いです。

（企画調整部　下山 千尋）

開館時間：９：00～16：30（入館は16：00まで）　入館無料／休館日：月曜日（休日の場合は翌平日）
ホームページ：https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/　お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）

■　お知らせ

シンポジウム

早川泰弘東京文化財研究所副所長・髙妻洋成奈良文化財研究所副所長 退任記念シンポジウム
令和５年３月４日(土)　於：東京文化財研究所 地下セミナー室
（YouTubeによる同時配信を予定）

詳細はこちら

藤原宮跡資料室　ロビー展示

11月１日（火）～３月31日（金）（予定）「2021年飛鳥・藤原地区発掘調査速報展」

■　記　録

文化財担当者研修

○遺跡調査技術課程	
9月12日～9月16日	33名
○層序学・堆積学・土壌学基礎課程	
9月26日～9月30日	23名
○保存科学（材質・構造調査）課程	
10月11日～10月14日	7名
○保存科学（遺構・石造文化財）課程	
10月17日～10月21日	8名
○中・近世瓦調査課程	
11月9日～11月11日	19名
○文化財写真課程	
11月21日～12月2日	10名

平城宮跡資料館　令和４年度　秋期特別展

「地下の正倉院展－平城木簡年代記〔クロニクル〕－」	
10月15日（土）～11月13日（日）	7,628名

現地説明会

平城第649次調査（興福寺東金堂院）	
10月15日（土）	1,120名

第14回東京講演会

10月22日（土）	178名

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　https://www.nabunken.go.jp
Ｅメール　koho_nabunken@nich.go.jp
発行年月　2022年12月